

寄付に託すものゝ寄付月間に寄せて

社会的・福祉的な、利他の目的でお金を回していくために、個人や企業による民間資金の活用が必要とされている。その方法には、融資や投資・出資などの多様な形が現れているが、その原点は「寄付」の心にあるのではないか。今一度、思いやりの心をお金にのせて社会に循環させる「寄付」の意義と醍醐味について考える。

証券市場で45年、そのうち証券

アナリスト、外資系年金運用会社社

長としてそれぞれ15年間働いた後、

2005年に一般生活者を対象とし

た投資セミナーを行う会社を設立。

大人はもちろん、子どもたちに向け

てマネー教育を行っている岡本和久

さん。長年、金融の世界で働きなが

ら考え続けてきたお金と心の関係、

投資と寄付の類似性、人生とお金の

ユニークな関わり方について話を聞

いた。

平和があつてこそ

幸せになれる

代表取締役社長 岡本和久氏

I・Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

の原点には何があつたのでしょうか。

岡本 私は戦後まもなくの1946

年12月14日生まれで、生家の台所に

は焼夷弾の焼け跡が残っていました

た。空襲の時は消防車も警察も来て

くれませんから、父親が自分で火を

消したそうです。私の名前は和久。

平和が久しく続くように、という意

味で親が付けてくれました。

また中学2年生のときに出会っ

た英語の先生にも、大きな影響を受

けました。彼は卒業前の最後の授業

で、「君たちに言いたいのはこれだ」

と言って、黒板いっぱい「Be a

peace maker」と書いたのです。

世界を平和にする人になりなさい、

ということですね。それくらい戦争

や平和について感じるものが身近な

—岡本さんは、投資や寄付などの教

育を通して「品格のあるお金の使い

方」を提唱されています。その活動



時代でした。ですから私の中には、平和についてのイメージがずっと存在しているのだと思います。

—岡本さんは1965年から2年間、コロンビア大学に留学されています。当時は、まさにベトナム戦争が激化している時代ですね。このときの経験はいかがでしたか？

岡本 アメリカ人の友人は18歳にな

ると、徴兵局に行つて徴兵登録をします。当然「ベトナムの戦場に行け」と言われれば、行かなくてはいけない。みんなベトナムのことが気になって、重苦しい雰囲気でした。成績が悪い順に行かされるのではないかという噂が流れたりしていました。そういう中で、悲痛な叫びがボブ・ディランなどの反戦歌に、込められていたんでしょう。

ところが、日本に帰つてきたら、まさに「我が世の春」で、高度経済成長を謳歌している。反戦歌をファッションとして楽しそうに歌っているんですね。その姿を見て、日本が「平和なのは、なしとしかあわせなことはない」と思つた。そういった経験を通じて、自分の中で、世界平和が生涯のテーマになっていったのです。

自分が本当に望むことを実現させる

—大学卒業後、日興証券に入り、ニューヨーク、東京で証券アナリストとして15年間キャリアを積ん

だ後、退社。1990年にアメリカの年金運用会社の日本法人社長になられます。これは大きな転機ですね。

岡本 あるとき、家でテレビを見ていたら、不祥事を起こした会社の社長が、お詫び会見で頭を下げていたんです。

妻が「どうしてみんな、社長になりたがるのかしら」と言うので、私は自然と「社長になったら影響力が強まるし、いくらでも世の中のためになることができるじゃないか」と答えていた。そうやって話しながら、自分で納得して「そうだ、社長になればいいんだ」と気がつきました。

—そんな動機で社長になったんですか？!

岡本 それから毎朝、「いつの日か社長になって、みんなが幸せになれるような仕事ができますように」とお祈りをしていたら、アメリカの年金運用会社から声がかかったんです。

—お祈りとはこれまたユニークな！

岡本 私は特定の信仰は持たないのですが、「生かされている」という意識はいつもあります。また、非常に尊敬していたアメリカの伝説的投資家、ジョン・テンブルトン卿の「投資で成功するには、雑事を離れる、富を人々と分かち合う、祈ることが必要です」という言葉に感銘を受けていました。そんなことで毎朝、お祈りをしていました。

その後、瞑想を始め、ここ20数年、朝夕、瞑想をしています。私が実践する超越瞑想（TM）は宗教とはまったく関係がなく、心を扱うテクニックなんですね。ストレスの多い仕事で生き延びてこられたのも、瞑想のおかげだと思っています。自分が本当に望むことを毎日祈っていると、想いがだんだん強くなり、実現へ向けて自分が行動するようになる気がします。

—そうして、まさに天職が降ってきた、という結果になったのですね。

岡本 声をかけてくれたアメリカの

会社も素晴らしいところで、「とにかく顧客にとって一番いいことをやる。どの競合相手より、お客様が喜ぶサービスをすれば、君たちはトップになれるんだ」と言うのです。まさに天から降りてきた言葉と同じだった。お客が喜んでくれれば、お金儲けを考えなくても、収益はあとからついてくるのだと。

—確かに、それがあるべき姿だし、それを、全うしなければいけないですね。

岡本 事実、そうやって、2005年には、投資顧問会社として年金運用資産額が、日本で最大級になりました。

—まさに社長として会社をトップクラスに育て上げた時、岡本さんは突如、退職され、投資教育のための会社「i・Oウェルス・アドバイザーズ」をひとりで作られた。今回もまた大胆な転身です。

岡本 運用資産額がトップになったことで自分のなかに達成感という

か、満足感がでてきたのです。上に立つ社長が満足しているようでは、会社の成長も止まってしまうと思いい、退職させてもらいました。そして今後は世の中へご恩返しをしたいと考えて、一般の生活者の人が、どうやったら退職後のためのお金を準備できるのか、どうしたら豊かで幸せな人生を送れるのか、ということについて一緒に考えるような事業を始めたのです。株式会社ですが利益を目的としない社会貢献企業です。

感謝のしるしとして お金を使っていく

—日本では、お金については学校でもまったく教えませんし、親世代でもお金の正しい知識は、持っていないように思います。

岡本 退職後に備えて、お金を増やしていくことは、もちろん大切ですが、より本質的に重要なのは「お金を何と交換するか」ということです。自分が必要なものやサービスを得るためにお金を使う。そういうものが手に入れば、ありがたい、嬉しいと

思う。お金で得られる幸福感に対する感謝のしるしがお金なんですね。これが基本的なコンセプトです。

—どのようにお金を使うかで、感謝することができるし、自分の幸福にもつながりますね。

岡本 そうです。自分が持っているお金の額が増えれば、それはそれで嬉しいでしょうが、資産がある一定額になると、それ以上、幸福感は増えないという研究もたくさんあります。結局、そこに上積みをして幸福感を増やすには「利他のリターン」。お金でモノやサービスを得るだけでなく、お金で人を笑顔にする。それによって、自分も笑顔になれる。「超マネー」のリターンですね。こういう風にお金に対する考え方を変えていくと、すごく違ったものの見方ができるようになります。

—「利他のリターン」ですか！ 寄付などで利他としてお金を使うと、笑顔のリターンをいただける。それは、お金を出した側の幸福感を、大いに高めてくれますね。



「ピギーちゃん」の貯金箱

岡本 そうやって周囲に笑顔を増やしていくのは、結局、私の生涯のテーマである平和ということにつながっていくと思うんです。

世界平和といって、別に国連に勤めたり、外交官になったりしなくてもいい。自分のやっている仕事や行動で、まわりの人たちが少しでも幸せになるようにしていけば、小さな平和のサークルができます。一つひとつは小さいかもしれませんが、それがたくさんできれば、平和がどんどん大きくなっていきます。

ハッピー・マネー四分法で お金とのつきあい方を学ぶ

—岡本さんはお金の教育の中で「ハッピー・マネー[®]四分法」という考え方を広めておられます。

お金の使い方を「つかう」「ためる」「ゆずる」「ふやす」の4つに分けて学ぶことで、お金と幸せなつきあい方ができるといって、ユニークな理論ですね。

岡本 もともとこの考え方を学んだのは、2010年くらいにアメリカの友達から紹介されたのがきっかけです。彼が息子に豚の貯金箱を買ったら、背中に四つの穴があるという。面白いなと思ってその会社を調べてみました。4つの穴は、それぞれ「Spend(つかう)」「Save(ためる)」「Donate(ゆずる)」「Invest(ふやす)」と名付けられていて、目的別に自分のお金を入れていく。それを見てピンときて、米国イリノイ州シカゴの北の方にある製造元の会社、マネー・サビー・ジェネレーション社と連絡を取り、シカゴに行き、

社長とランチ・ミーティングをしました。話しているうちに、すごく共感する部分があって、彼らと独占販売契約を結び、2013年4月からこの貯金箱の販売を日本で始めました。

現地では「マネー・サビー・ビッグ」という名前ですが、日本では「ハッピー・マネー[®]のピギーちゃん」と呼んでいます。

—「ピギーちゃん」に貯金するたびに、4つのどの穴に入れようか考えます。それがお金の使い方教育につながりますね。

岡本 アメリカでは、これは三歳の子供から使っている教育玩具です。「つかう」というのは、今欲しいものを買う。つまり今の自分のために使うということです。「ためる」は、欲しいものなどを買うために貯金をする。毎月のお小遣いでは買えないけれど、時間をかけて貯めることで大きな買物ができる。これは少し先の自分が喜びを得るために、お金を貯めるということです。「ゆずる」という

のは自分のためではなく、他人の喜びのためにお金を使う。寄付をするということなんです。そうやって人に笑顔をあげると、自分も笑顔になれるのです。

—「Donate」を「ゆずる」と翻訳されたのは、とてもいいセンスだと思います。

岡本 「ゆずる」だと小さな子どもでもわかるし、寄付に対する抵抗感がないんですね。それに、ただ募金箱にお金を入れるだけでなく、主体的に気持ちを込めてお金を「ゆずる」んだというイメージがです。

—最後の「Invest」が「ふやす」となっています。「ためる」との違いとはなんでしょうか。

岡本 「Invest」は投資ということなんです。今、自分が必要としないお金を、今、必要とする人に使わせてあげる。その人がビジネスをはじめて、世の中に役立つ仕事のためにお金を使い、みんなから感



謝されて、お金が集まってくる。その収益の一部が自分のところに戻ってくる。自分のお金が外の世界に出て、働いてくれているのですね。

— そう考えると、今の自分はとても小さな世界に住んでいても、投資を通じて未来の世界につながっていく。そして自分のため、人のため、世の中のためと、だんだん意識の中の時間と空間が広がっていきます。

— 岡本さんから説明していただくと、「投資」という、一見難しいお金の扱い方がストンと納得できます。

岡本 私は、基本的には投資のリテ

ラシー教育とか、金融教育をしないでもいいのが理想だと思っているんです。コンビニで買い物をするのに、コンビニの安い物リテラシーなど学んだこともないし、上手な買い物方法を学校で教わったわけではない。それでもみんなは、自分が何を求めているのか、何が必要なのかをわかっている、メーカーや値段、カントリー、賞味期限などを見ながら上手に買い物をしています。

— 投資についても同様で、最低限の知識を、ある程度持つていけばいいと思うのです。そのためには理論的に正しい方法で、しかもだれでも手軽にできる資産運用法が必要です。私の仕事は、それを普及することだと思っています。

— 基本的なことを知ったら、あとは実践する、でしょうか。

岡本 水泳を覚えさせるのに、まず本を読んで水泳理論を学ばせる人はいないでしょう。最初は浅いプールに入り、水に慣れて、楽しいと思ったら、ちょっと深いところまで入ってみる。スマホが普及したのは、み

んながスマホの構造を理解したからではない。使い方が簡単になったからです。投資についても、そうやって簡単な方法から身につけるのが良いと思います。

投資と寄付のユニークな関係

— 「投資⇨ふやす」と「寄付⇨ゆずる」というのは、まったく違う言葉ですが、笑顔を増やすという点では、共通点を感じます。

岡本 まず、お金全体の流れを考えると、我々は働くということで、企業に知力、労力を提供して、対価として賃金をもらいます。これが「つかう」「ためる」「ゆずる」「ふやす」の原資になっていきます。

— この中で「つかう」と「ためる」は、モノやサービスを買うことで消費者になるということ。また同時に銀行預金、あるいは年金や生命保険などのお金は間接的に企業に流れていて、投資という形で、資金を企業に活用してもらいます。これらのお金の動きによって、企業はできあがっているのです。

— 私たちは仕事をして企業からお金をもらい、そのお金を今度は企業にまわしているということですね。

岡本 そして企業が世の中のためになることをして、みんなから感謝されることで利益が上がる。これが投資のリターンになって、また戻ってくる。その中の一部分が、今度は寄付という形で中間支援組織にいたり、福祉事業、社会貢献事業にまわっていく。あるいはお金を通さず、直接、労働と時間を提供するというボランティア活動に取り組むものもあるでしょう。

— それが「ゆずる」につながる。

岡本 さらに考えてみると、企業というものがもともと存在し、そこに我々が従属しているわけではありません。生活者が、一人ひとりの小さな力を合わせて、自分たちは「こういう社会を創りたいな」という共通の想いをもって、集団を形成してできたのが企業です。

— 企業は結局、消費者である顧客、

おかもと・かずひさ

米コロンビア大学留学後、慶應義塾大学経済学部卒。1971年日興証券株式会社入社。ニューヨーク現地法人などで証券アナリストとして働く。1992年に退社し、パークレイズ・グローバル・インベスターズ日本法人を設立し、年金運用業務に携わる。2005年、同社が年金運用資産額で業界トップになったのを機に退職。個人投資家向け投資セミナーを行うI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社を設立。各種セミナーを開催し、長期投資家仲間によるクラブ・インベストライフを主宰。マネー教育教材「ハッピー・マネー®のピギーちゃん」を販売し、子どものためのマネー教育を行うハッピー・マネー教室を展開している。

従業員、直接、間接に提供される生活者のお金によってできています。もとなっていては何かといったら、全部生活者。生活者が便宜的につくっているのが企業だ、ということに発想を変えていくべきではないかと考えています。

生活者として、あるときは消費者、あるときは従業員、あるときは資本の出し手として、企業の行動を統治していくのが本来の姿です。こ

ういう大きな枠組み中で考えていくと、お金を使うこと、増やすこと、寄付も含めて、ひとつの絵としてまとまるのかなと思っています。

貯蓄が投資かではなく 寄付から投資へ

—岡本さんご自身も、さまざまな寄付活動をされていますね。

岡本 70歳になるのを機にというわけでもないのですが、明治大学に寄付をして「株価指数研究所」を作っていたいただきました。

明治以来、ずっと続いている日本の証券市場の基礎データを集めるのが目的です。日本は、アメリカでできあがった理論を持ち込み、それになんとかやってきたのですが、やはり不十分なのですね。明治時代、さらに言えば堂島の米相場など歴史的な伝統は今も引き継がれている。これらができる限りデータとして残したいと思い、取り組んでいただいているところです。

また、私の実践する超越瞑想（TM）の普及を支援する活動も12月か

ら始めました。人々のストレスが解消されれば、世界も平和に少しは近づきますから。

—まさに「品格のあるお金の使い方」ですね。

岡本 無駄なことに使うだけではなく、できるだけみんなが喜ぶことのためにお金を使うといいですね。それは究極的には寄付ということだし、あるいはミュージックセキリティーズ株式会社が実施している「セキリティイ被災地応援ファンド」（※）のように半分寄付、半分投資という形も面白いと思います。

最近、よく言われるような「貯蓄から投資へ」ではなく、「寄付から投資へ」という発想の転換です。

—被災地支援で、最初はみんな寄付をしましたが、それが投資へと移っていくということでしょうか？

岡本 寄付というのは、困っている人を応援する。助けを必要としている人を応援することで、それが最初の段階です。その後、応援した人た

ちが育って、彼らが行っていた事業が大きくなり、最終的には、その収益の一部をもらうことになる、それは「ふやす」投資でもあるし、収益ではなく、育てたという喜びをもらうという意味では、「ゆずる」という寄付でもある。また、寄付を受ける側も、単に助けをもらうだけではなく、リターン、お返しもしたいと思う。貯蓄から投資へというのはなく、寄付の延長線上に投資があると考えていくと、もの見方がすごく変わってくると思うのです。

—寄付も投資も、信頼と感謝の循環を創りだすものですね。私どもも、寄付育という形で、子どもたちの利他の心をカタチにして、より幸せで豊かな成長の伴走ができれば、と思っています。お金を媒体とした関わりというのは、とても奥が深く、心豊かな創造性に富んでいるもの、ということがわかりました。

本日はありがとうございました。

インタビュ―

公益社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋陽子

【2016年10月26日当協会にて】

※東日本大震災で被害を受けた事業者に対して、1口5000円の寄付+5000円の投資を行うマイクロファンド。応援したい企業を自分で選び、長期にわたって支援をする。投資家特典として、支援企業の商品が届いたり、分配金が支払われるが、場合によっては元本割れてしまうこともある。